4. キリシタン版と『ひですの経』
・発見の経緯
・特殊なキリシタン版（木活字の活字印影が多い。定訓と固定表記の関係に反する。）
・活字デザインの相違，「第三種活字」の作成
・断簡（裏表紙の裏打ちに利用された反故紙）と本篇の相違

5. 原田版『こんてむつすむんぢ』の版式
・異なった形状の活字，乱版（活字と木版の混合装丁）
・連綿率と非連綿の例

使用資料：
キリシタン版『Flosculi ex veteris, ac novi testamenti』
『スピリツアル修行写本』
重要文化財『ドチリーナ・キリシタン』の複製本

キリシタン文献 II——キリシタン版の紙と活字——

豊島　正之
（上智大学教授）

キリシタン版の紙と活字を書誌学的に検証し，日本の書誌の特徴を把握する。また，校正におけるさまざまなエピソードについて印刷物を通して考察し，当時の印刷方法や技術について理解する。

1. はじめに：キリシタン版の種類

2. 判型：判型の格付け

3. 判式：面付け

4. 紙（繊維）：文書の種類と紙との対応
麻紙，楮紙，斐紙

5. 紙（格付け）
鳥の子，写本，キリシタン版の紙

6. 活字
仮名・漢字金属活字印刷，漢字鋳造の技術，印刷年表，Jorge de Loyala 版下（筆跡と草書体）

7. 校正
校正者，印刷者，著者

8. 翻訳
その国最初の印刷

9. 家康の活字
　キリシタン版と家康の出版

使用資料：
　キリシタン版『Flosculi ex veteris, ac novi testamenti』
　『スピリツアル修行写本』
　重要文化財『ドチリーナ・キリシタン』の複製本

中央アジアの非漢字文献――ウイグル文献とモンゴル文献――

松井　太
（東洋文庫研究員・弘前大学教授）

中央アジア出土のウイグル語文献とモンゴル語文献について，書誌学的な基本知識を理解し，その歴史的背景と地理的分布を把握する。また，歴史資料としての文献とその研究方法と工具書について学ぶ。

1. はじめに
　・「中央アジア」：東トルキスタン（新疆）＋西トルキスタン（旧ソ連領中央アジア）と周辺
　・ウイグル語とモンゴル語
　・「中央アジア探検」により将来
　・10 ～ 14 世紀の内陸アジア史に関する一次史料としての価値

2. 主要なコレクションと目録（研究機関）［主にウイグル語資料］

3. 歴史資料としてのウイグル語文献とその研究
　1）文献目録・研究動向
　2）時代：9 世紀後半，ウイグルの西遷→西ウイグル国～モンゴル帝国～ 14 世紀末
　3）書体による時代判定：楷書体，半楷書体，半草書体，草書体
　4）地域：東部天山地方（トゥルファン盆地，クチャ），甘粛～敦煌モンゴル時代には大都や江南で印刷された典籍類が流入
　5）分類：①典籍（写本＋刊本：仏典，マニ教，キリスト教，民間信仰等）
　　②文書（写本：公文書，私文書，「文書＋記録」）
　　③碑銘

4. 中央アジア出土モンゴル語文献
　ドイツ隊将来（トゥルファン地域），敦煌莫高窟，カラホト出土文書，内蒙古博物院

5. データベース（ウイグル語・モンゴル語，他言語）

6. 文法書

7. 辞書